

書評

マージョリー・H・ウーラコット・他 編／矢部京之助 監訳

姿勢と歩行の発達—生涯にわたる変化の過程

江原 義弘 (神奈川県総合リハビリテーションセンター)

本書は「ヒトの平衡機能が生涯にわたってどう発達するか」を記したものである。ここでは姿勢は徹底して動的なものとして捉えられている。ここでは姿勢は直立平衡機能と同義である。同様に歩行はヒトが移動中に行う平衡回復作業として捉えられている。したがって本書の内容を一言で言えば「直立時ならびに歩行時における動的平衡機能の発達」である。

平衡機能の研究の困難性は対象の複雑性・複合性にある。しかも対象を分割して研究することは困難である。体性感覚・視覚・前庭系からの入力を個別に研究することは困難だし、感覚入力と反応とを切り離しては研究できない。神経系と筋骨格系も分離できない。このような中であって研究者達は小児・成人・高齢者・スポーツマン・障害者を互いに比較研究することによって全体像を少しずつ明らかにしてきた。本書はこの困難な対象に正面から立ち向かっている22人の執筆者による研究の現況の集大成である。今までこの問題にかかわることを尻ごみしていた私にとっては大いに勇気づけられる本である。

章だてはよく整理されており、この分野の研究の全体像がよく把握できる。対象は小児から高齢者、

スポーツマン（体操・バレー）から平衡感覚失調まで広範である。内容は基礎理論のまとめから小児の発達異常、高齢者の転倒の予測、高齢者の運動機能に対する可塑性、運動競技のトレーニングが姿勢の安定性に及ぼす影響、障害者における姿勢のリトレーニング、姿勢のリトレーニングにおけるバイオフィードバックの妥当性などが取り扱われておりきわめて実践的である。研究が単なる自然科学としてでなく医療の一側面としてしっかり根付いているのがうかがわれ好感がもてる。その意味ではリハビリテーション分野の臨床家の方々にたいへん参考になる書物となろう。ただし読者はこの書に自分の疑問の解答を求めても無理であろう。この書は解答を提示するものでなく、現状の問題点を明らかにすることによって、むしろ読者をこの分野の研究にいざなっているように思える。

平衡機能は単なる反射の集積ではなく、もっと複雑でもっと複合化されたものであり、しかもわれわれが考えている以上に環境に対する柔軟な適応性をもっているようだ。その柔軟性がどこからくるのかまだ良くわかっていない。

訳はやや固い。

(菊判 328頁 4,120円(税込) 1993 大修館書店刊)